
時が戻せるなら

小野寺悠輔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時が戻せるなら

【Nコード】

N72510

【作者名】

小野寺悠輔

【あらすじ】

別れてから40年大輔と美樹の再会。2人の運命は???

いつも目に映る、そんな見慣れた町が今日はぼやけた姿でたたずんでいた。

気づけば一人。帰りの列車を待つホームに立ちすくんでいた。

「なぜあんなことをいつてしまったんだろう」大輔は後悔をしていた。

それから1年、受験期間中も大好きなサッカーをしていても、ふとしたときには彼女を気にしてしまう自分に情けなさを感じる大輔がいた。

「もはや、好きなんかじゃないんだ。美樹に対する情なんだって。

こんな物なくなればいいんだ」言い聞かせる日々が続いた。それでも例えるならばフランス人形のように、くしゃっと崩れるそんな彼女の笑顔を忘れずにいた。そんなある日、大学生となった大輔は美樹に対する思いを告げるために携帯を取る。降りしきる雨の中、傘もささずに外へ走り出す。

「070-xxxx?xxxx」少しかじかむ手に息を吹きかけながら、ダイヤルを押す。「あのさ、そういえば……」付き合っていた当時の思い出を緊張を必死で隠しながら淡々と話続けた。

今日も大輔の視界は涙でぼやけている。

話の終着点は、もう一度付き合って欲しいとの事であったが、大輔はなかなか告げられずにいた。もう1度振られるのが怖くて仕方なかったのだ。通話時間は早くも三時間、雨に振られ、ふやける手を見ながら大輔はやっとの思いで告げる

「やっぱりさ、1年経っても、変わらなくて…」
「ごめん…」

大輔の一念越しの思いはこの一言で掻き消されてしまったのだ。

それからというもの、忘れんばかりに、毎日遊びに走るようになった。学校もさぼり、毎日クラブに通うようになり、2度と彼女に連絡を取る事も、会うことも無くなった。

40年後そんな大輔も還暦を迎える60歳。

長いコンサルタントとしての活動を終えて、ゆっくりと老後を過ごす日々。高校以来の友人が経営するいつものコーヒー店に向かう道のりに、大輔は黒い喪服を装う若い美しい女性とすれ違う。

なんだか凄く懐かしさを感じた。ふと振り返り、彼女の背中を追いかけた。

妙な違和感を感じた。その先には喪服の集団が集まり、どうやらお通夜に参列をする人々であった。

「俺もいい歳だ」そう遠い話ではないと妙な親近感を抱いた。

お通夜会場を覗くようにその場を後にする。

その時大輔の目に信じがたい光景が映り込んだ。

明らかに見た事のある顔。あの時の美樹が微笑む姿を目にすること

ができたのだ。

すでに大輔の頬は一粒の涙がこぼれる。

当時の思い出がどんどんフラッシュバックをしてくる。

勉強の合間に笑い合いながら観た映画、大好物だったアイスクリーム。彼女と出会った塾の教室。人生でもこれほどまでに幸せな日々があったかと。

今からでも間に合うなら、これからの人生、時間をともして行きたいと強く願った。

大輔は袖を濡らし美樹に近づいた。

またしても視界はぼやけていた。

笑顔を絶やさず自分よりも2メートルばかり高く見下ろすように見

る彼女に、大輔は笑みをこぼしながら言った。

「ずいぶん早いな。俺も長くない。次はもう一度チャンスをくれ」と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7251o/>

時が戻せるなら

2010年11月6日13時41分発行